

# 農業高校生の進路をめぐる問題

前全国農業高等学校長協会調査研究員 小暮 通夫

社会及び経済の変化と教育改革というふたつの波によって、日本中の学校が大きく揺さぶられている。農業高校もその波の外に立っているわけではない。というよりも、最も大きく揺さぶられているのが農業高校だと言えるだろう。それは、実習を始めとする毎日の授業にも卒業後の生徒の進路にも、これまでと大きく異なった影を投げかけている。ここでは、進路をめぐる問題のいくつかについて考えてみたい。

## 増加する進学者と無業者

農業高校生の進路をみると年々進学者が増加し、平成2002年3月卒業生において初めて4割を超えた(41.6%。農業校長会調査研究委員会の統計による)。進学率の上昇は商・工・家等他の専門学科高校についてもみられ、既に6割を超えたところもある。専門学科高校生の進学率上昇についていえば、高校生がこれまで学んだ専門に関する知識と技術をいっそう深め学問的な裏打ちも求めるようになったという積極面と、高校新規学卒者の就職先がますます限られてきたので進学に転じたという消極面のふたつが考えられる。もちろん教育現場にいる者としては、生徒の向学心・探求心を高めるよう平素の授業からつねに配慮し、たとえ生徒が消極的な意味で進学を選択した場合でも、それを積極的な進学意欲・学問的欲求に転化させるよう努力すべきである。

しかしそれは、ことばで表すほど簡単ではない。それを如実に示すのが、無業者の増加である。前記校長会統計によれば、農業高校卒業生の卒業時点における無業者率は、2000年に10%を超え、以後10.1%、10.6%とこれも漸増傾向をみせている。向学心・探求心の向上もいまひとつ、そして(狭い意味での)学力も十分とは言えない、また家庭の経済状況も高額化する授業料の負担に耐えきれない、就職求人は少ない、といった様々な要因が複合して、無業者の増加という結果が生じている。

ちなみに同じ統計で地域的な傾向をみれば、03

年4月農業高新卒者無業者率は、首都圏(1都3県)で19.5%ときわめて高い値を示しているのに対し地方ではかなり低くなっており、たとえば九州7県では7.9%である。もちろんこれは、大都市とその周辺に、無業・フリーターを可能とする状況(物理的にも意識の問題としても)があることを意味している。

## 無業者増加が提起する問題

無業者の増加に関しては多くの議論がなされているが、ここではふたつのことがらを指摘するにとどめる。ひとつは、現在の高校生ほか若い世代の職業意識や自己理解の不足と無業を許してしまう家庭の意識をばかりに、無業者増加の責めを負わせる議論の多いことである。その問題もきわめて重要ではあるが、やはり、日本経済の冷え込みや社会状況・意識の変化もみなければならぬだろう。高度成長やバブルの時代、若者たちの職業観や自己理解が十分であったから就職が順調だったのであろうか。売り手市場の中で、多くの高校生も大学生でさえも、自分がどんな業種、職種に向いているかつきつめて考えてはいなかったろう。とにかくいい大学へ、いい企業へ、社内研修後に振り分けられた職場へ…というケースが大部分であったと思う。それは、高校生・大学生・家庭ともが職業観等を重視していなかった姿であるが、それ以上にまた、我々教育関係者が右肩上がりの経済におんぶして、生徒たちに自己を見つめさせ望ましい職業観・勤労観の育成を等閑視していた結果でもあったのである。狭い意味での進路指導を超えて、生徒に自己を深くみつめさせ、自己実現を通じて社会貢献もなしうる道を探させることこそが、今、これまで以上に望まれている。

さて、無業者の増加に関してもうひとつ指摘しておきたい。それは、無業者の増加は困ったことだが進学者の増加はめでたし、というように問題は単純ではなく、実は両者はひとつの問題なのだということである。先に、高卒で就職先がないからという消

極的な進学に触れたが、もし首尾よく進学したとしても、それは高卒就職難を数年先延ばしするにすぎないというべきだろう。とくに農業系についてみた場合、高卒ではだめだが大卒ならOK、という就職先が大量に存在するとはとうていいえまい。たとえばバイオなどはそうした数少ない例なのだが、各地の大学のバイオ系学部及び定員増によって、たしかに農業高校から大学バイオ系学部への進学者が増加している。しかし、大学のバイオ系学生数は一説によれば産業界の需要数の50倍にのぼるともいわれており、進学することによって就職難はいつそう高まるという現実がある。

同様の状況は、農業系学部以外についても指摘できる。文部科学省や総務省の数字をもとに若干の推計も含めた鹿嶋研之助氏のシミュレーションによれば、高卒時無業率10.3%に対し、大学及び短大卒業時の無業率はなんと32.1%にはねあがる。しかもこれは、新規卒業時の問題にとどまらない。企業がパートや派遣社員の比重を高めるなど雇用様態の大きな変化、製造業における生産拠点の海外逃避等の状況から、若年層雇用機会はますます減少しており、かつて20歳前後であったフリーター人口のピークはじきに20代前半に、そして、2000年にはついに20代後半に移行した。この先数年後には30代前半がフリーター人口のピークをなすとの予測も成り立つ。

### 農業後継者と新規営農者

さてここまで就職にせよ進学にせよ、農業高校で学んだ専門的な知識・技術を生かした進路選択ができていくかどうかという重要な問題をぬきにしてきた。これに関してはつきつめてゆくと旧農基法やウルグアイラウンド等までさかのぼることとなり、紙幅も私の力もとうてい不足している。そこでここでは、農業後継者と新規就農者の問題から入って若干の問題提起をするにとどめたい。

既出農業校長会の統計によれば、農業高校の卒業生は1998年から2003年までの5年間で実に18.1%もの減少を示している。少子化の進行する中での全高校卒業者の減少と比してもこれはかなり高い数字である。全国各地での高校改革の中で、農業系学科が減少し総合学科等へ移行したことも減少に拍車をかけている。その中で農業後継者の比率は、ずっと1.0%ではりついている。Uターン帰農と高校新卒

後継とを明示した統計は見あたらないので厳密には言えないが、農業高卒生減と後継者減がほぼ同じペースで進んでいるとみることもできる。この数字を「まあそんなところだろう」などと安易に受け止めることはできない。2003年4月21日付の『日本経済新聞』によれば、新規就農者は1995年に10万人を突破し2001年には16万人に達したという。その記事はいわゆる「定年帰農」を主に扱っており、その記事以外でも耳目に触れるもののほとんどは「青年帰農」も含めていわゆる「Iターン」である。はっきりしたデータはないので確言できないが、農業高校が、家業を継ぐにせよ新規営農にせよ、農業従事者を生み出すことに成功しているとは言い難いようにも思う。ひとつの参考として、農業後継者・農業関連産業就職者・農業研修所や農業大学校・農業系大学短大等進学者をすべて加えた者が農業高校卒業業者の中でしめる比率をみると、2000年26.0%、02年に24.5%と低下を見せている。ゆるやかに流れる時間、自然との共生、命に触れるよろこび、ヒーリング等々、農業を評価する声はとみに強まっているにもかかわらず、農業高校ではそこに飛び込もうとする青年を生み出す大きな力になっていないのかとさえ考えさせられてしまう数字である。

### 農業教育の充実こそが活路を拓く

私は少し悲観的な言説のみ連ねてしまった。Iターン帰農も今まで農業と無縁だったからこそその魅力にとりつかれたのであって、農業高校卒業生は、たとえ直接農業に関する職業に従事しなくても、農業のもつ魅力と重要性とを十分認識しつつ毎日を送っているのだと言うべきだろう。現に私は、自分や家族のための時間をなげうって、そうした農業のすばらしさを生徒に伝え続けている多くの教員に全国各地で出会ってきた。だからこそ農業高校は、あるいは農業教育に携わるすべての者には、自信を持ってさらにいつそう農業教育の充実につとめることが求められていると言えよう。農業教育の充実こそが、農業高校生の進路と農業の未来を拓くための、地味ではあるが確実な唯一の道であるにちがいない。